**城の職人技：漆喰**

日本の建築業者は何世紀もの間仕上げ材料として漆喰を使ってきた。漆喰には単なる見た目に関わる目的以上のものがある。漆喰は木でできた建物を火事から守り湿気による腐食を防ぐのに役立っている。火事と湿気は日本の伝統的建築物にとっての脅威の代表的な 2 つの例と言える。

姫路の漆喰の作業は日本の他の城に見られる以上に幅広い。壁は両側が覆われていて(多くの城では外側のみ漆喰が塗られているが)、漆喰はまた土でできた周囲の壁と屋根瓦の接合部にも適用されていた。全体としての効果は異常に白い外観で、姫路のあだ名である白鷺城がでてきたのである。

姫路の漆喰を構成するものは時代と場所により様々であるが、典型的な作り方は次のとおりである：二種類の石灰、すなわち石からとれたものと貝殻からのものを準備する。すりつぶした麻からできる繊維質の材料「苧」を加える。それから水とゆでた海藻からできるのり状のものと混ぜ合わせなさい。

**壁の内部**

漆喰は城の壁を作り上げる多くの層の最後に使われるものだ。建築者たちは「木舞」と呼ばれる竹の枠のような木と竹の格子を用意した。それから壁を作るために枠組みに泥を流し込んだ—姫路城の場合は、4 層の泥が使われた。それが乾いたあと、職人たちがその泥で 2 層の漆喰の壁を覆ったが、それぞれがわずかに違った材料でできていた。

**木と竹の枠組み**

土の粗壁

表面を均等にする 2 度目の塗り

表面をなめらかにする 3 度目の塗り

最後の泥の下塗り

漆喰の下塗り

漆喰の上塗り

天守閣の壁は上の階に登るほど薄くなっている。1 階と 2 階では壁は厚さ 45 センチ

メートルで始まるが、4 階と 5 階では 41 センチメートルと薄くなり 5 階と 6 階に至ってはおよそ 30 センチメートルである。その壁の厚みの大部分は乾いた泥である。漆喰は相対的に薄い層で、要塞の外側では厚さおよそ 30 ミリメートル、そして内側では厚さほんの 2、3 ミリメートルである。

土壁
漆喰
漆喰
内装
外装

**見て感じて**

姫路城の壁と屋根の接合部の漆喰は石と貝殻石灰、弾いて粉にした麻と海藻のデンプンからできている。砂も時には加えられる。